

少雨に関わる農作物への技術対策

平成24年(2012年)6月4日

農業技術課

1 本年の4～5月の降水量(気象庁アメダスデータより)

	長野			上田			松本			飯田		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
4月上旬	15	19.9	75	12.5	20.7	60	23	26.2	88	37.5	44.9	84
4月中旬	20	17.5	114	25.5	20.3	126	14.5	27.5	53	67	46.2	145
4月下旬	9.5	16.6	57	16	15.8	101	12	21.6	56	24	36.3	66
5月上旬	18	23.2	78	18	22.6	80	6.5	27.5	24	7	50.1	14
5月中旬	7.5	31.5	24	12	32.1	37	5	39	13	25.5	62.5	41
5月下旬	12.5	20.4	61	4	27	15	4.5	33.5	13	11	45.9	24
6月上旬	19.5	20.4	96	9	27	33	2	33.5	6	11	45.9	24
合計	82.5	129.1	64	97	138.5	70	65.5	175.3	37	172	285.9	60

6月上旬は6月3日までの積算値

松本、上田地域の降水量が依然少ない状況と思われる。また雷雨による降雨なので、地域内でもバラツキが大きいものと思われる。

2 対策

(1) 水稻

- ア ため池の水に頼っている地域などで、今後少雨が長期間続くと水不足が心配される場合は、地域ごとに配水計画を立てて、早めに計画的に配水し、適期内に田植えを終えるようにする。
- イ 田植え後の活着及び初期の生育を促進させるために、止め水管理を確実にを行い水温の上昇に努める。
- ウ 田植えが終了した本田では、畦畔の点検・補修を行い、漏水防止に努める。

(2) 麦

- ア 水田転作など、かん水可能なほ場で、かつ排水溝を掘るなど排水対策を実施済みのほ場では畦間かん水を行う。ただし、かん水したら直ちに排水して湿害を受けないようにする。
但し、は種前後の排水対策が不十分だったため、湿害を受けているほ場では、根の張りが悪く、乾燥の被害を受け葉の縮れ等が見られる。この場合は、かん水により逆に湿害が助長される恐れがあるので、かん水は行わない。
- イ 枯れ上がりのひどいところは、刈り取り時期が早まるので、適期刈り取りに留意する。

(3) 果樹

ア かん水と土壌管理

かん水可能な果樹園は、早めにかん水を行う。かん水間隔の目安は、概ね5～6日間隔とする。

全面かん水が困難な場合は、樹冠下の根域を中心に部分かん水を実施する。水分の競合を防ぐため、草生園では下草刈りを、清耕園では除草を兼ねて浅く中耕を行う。なお、樹冠下に敷きわら等のマルチを実施し、土壌水分の保持に努める。

イ 生理障害対策

少雨により土壌が乾燥すると、りんごの垂鉛欠乏症、ぶどうのホウ素欠乏症などの発生が心配されるので、必要に応じて葉面散布肥料の散布を行う。

ウ 病虫害防除

乾燥が続くと、ハダニ類やアザミウマ類などの害虫発生が心配されるので、適期防除に努める。

エ りんご、なし、もも

結実は概ね良好である。一部地域では、摘果の遅れによる果実肥大不足が懸念される。

また一部では「ふじ」の結実や種子入りがやや悪く、肥大不良が心配されるので、このような園では摘果作業を計画的に早期にすすめる。

オ ぶどう

果樹試験場（須坂市）における「巨峰」の開花予測は、平年の6月8日より2日遅れの6月10日と予想されている。

展葉枚数などの生育状況をよく観察し、適期に農薬散布や花房管理作業を行う。

有核「巨峰」は、落花期以降かん水を行う。無核栽培では、定期的にかん水を行う。

(4) 野菜

ア マルチの展張

マルチ展張作業は土壌水分を確保してから行う。乾燥が続いたほ場では、短時間の弱い降雨では土壌表面が湿る程度で、生育に必要な水分が確保できないことから、降雨の状況を見ながらスプリンクラー等でかん水を行う。強風時にはかん水むらになりやすいので注意する。

イ 定植時の乾燥

定植時に土壌が乾燥している場合は、ポット苗やセル苗の培地かん水、植え穴かん水や定植後の株元かん水を行うなどにより、活着を促す。また、主に葉野菜類でかん水可能なほ場では、スプリンクラー等でかん水する。

ほ場準備の遅れや土壌水分不足などから定植が遅れた場合は、苗の老化に注意する。葉菜類で苗の老化が進み、苗に余裕がある場合は、定植適期苗を優先して定植する。

ウ 定植後の乾燥

かん水が可能な場合は、生育量に合わせて定期的なかん水を行う。かん水は過乾燥になる前に行い、水分ストレスを生じないように注意する。はくさいの心腐れ症、セルリーの心腐れ症、トマトの尻腐れ果などの生理障害が発生しやすいので、カルシウム等の含まれた微量要素肥料の葉面散布を行う。また、レタスでは、干ばつ後の降雨や高温などによって肥効が高まり、タケノコ球やタコ足球など変形球が出やすいので、むやみな追肥を行わず適正な草勢を保つようにする。

果菜類では開花期および果実肥大前期に水分要求量が高まるので、生育ステージにあわせてかん水を行う。露地の果菜類など畦間等へ敷きわらを行う品目で、かん水ができないほ場では、土壌表面からの水分蒸発を抑えるため、敷きわら等の作業を早めに行う。

エ は種時の乾燥

直は栽培で、は種の前または直後に土壌水分確保が見込めない場合は、は種を遅らせることを検討する。

オ 施設栽培の管理

野外の乾燥状態が続くと、施設内も土壌乾燥傾向や湿度低下傾向になる。きゅうりやカラーピーマンなど、水分ストレスから側枝の伸長不良や葉先枯れを起こしやすいので水分管理に注意する。

カ アスパラガス

収穫中の、かん水可能なほ場では、かん水により土壌水分を確保し萌芽を促す。水分不足は萌芽不良や若茎の曲り、スジ入り、穂先の開きなど品質低下を招くほか、鱗芽の障害につながる恐れがある。立茎中のほ場では、茎葉が濡れないように畦間かん水等で土壌水分を確保する。

キ 除草剤の処理

土壌処理剤を使用する場合は、土壌水分を確保してから行う。水和剤等では希釈水量を規定の範囲で多めにする。

ク 病虫害対策

降雨が少ない状態では、アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類の発生が多くなるので、適期防除に努める。

(5) 花き

ア かん水と土壌管理（特に露地花き）

水不足により、草丈やポリウム不足が懸念される。

地域によっては土壌水分が極めて少ない状況にあるので、うね間かん水等により充分にかん水し、草丈やポリウムの確保に努める。

かん水が出来ないようなほ場は、敷きわらやポリマルチ等で地表部からの水分の蒸発を少なくするように努める。

定植を予定しているところで全体へのかん水が難しい場合は、植溝もしくは植穴にかん水して、苗が老化しないうちに植え付けを行う。

イ きく

定植後の著しい乾燥は活着・生育不良となる。

敷きわら等を行って土壌水分の維持に努める。また、トンネルを除去する際は、曇天の夕方など蒸散の少ない条件を選んで行う。

ウ りんどう

新植ほ場では、定植後の著しい乾燥により、活着せず生育不良となるので、上部からの灌水を行い活着を促す。

据置ほ場では、必要に応じ通路かん水を行って土壌水分の保持に努める。しかし、畦の高さまで及ぶような過剰なかん水や、長時間水をためておくと根腐れを起こすので注意する。

エ シンテッポウユリ

新植ほ場は、すでに活着してきているが、必要に応じ 1,000 倍程度の液肥を施用し、水と肥料成分を補う。